

科学と資本主義の未来〈せめぎ合いの時代〉を超えて

写真の広井良典さん近著を読んだ。これまでも広井さんの多くの新書を読んできたが、問題意識の広さと時間軸の長さに学ぶことが多かった。18日の「京都ゼミ」のテキストであり、若い人たちとの討論が楽しみだ。広井さんらしく、テーマが多岐にわたり、論点満載なので、とりあえず「はじめに」から本書のアウトラインを概観してみよう。



「せめぎ合い」の時代という時代認識を軸に、科学とこれからの経済社会のありようを大きな視点で考えていくのが本書の内容である。

議論の流れとして、まず第1章（『火の鳥』2050—未来を考えるとはどういうことか）は本書の土台にある関心を示すものであり、私が近年行ってきた「AI（人工知能）を活用した未来シミュレーション」に関する共同研究や人類史的視座、さらに科学とコスモロジーという視点から、人間が「未来」について考えることの意味を、様々な角度から掘り下げてみたい。

第2章（なぜいま「幸福」が社会的テーマとなるのか）では、「幸福」（ウェルビーイング）の現代的意味や科学・技術との関わりを考え、第3章（科学と社会の共進化）では科学・技術と社会の歴史的な関わりをレビューしつつ今後の展望を提起する。

これらを踏まえて、第4章（ケアとしての科学）ではこれからの科学のあり方を「ケア」という視点からとらえ直し、新たな方向を考える。併せて第5章（資本主義の論じ方）では、そもそも資本主義とは何かという問いを掘り下げると同時に、「資本主義・社会主義・エコロジーのクロスオーバー」という展望を示す。

これらを受けて、第6章（鎮守の森と生態都市）、第7章（医療・超高齢社会と科学）、第8章（生命・情報・エネルギー）は、いくつかの個別領域における科学・技術と社会の意味を論じる。そして第9章（科学予算と世代間配分）では、世代間配分の見直しと若い世代への支援という、現在の日本においてもっとも対応が急がれる話題について論じる。

「おわりに」からも紹介しておきたい。現在の日本は昭和的な「拡大・成長」一辺倒の時代から、「持続可能性」に軸足を置いた社会への大きな過渡期にある。それは本書のタイトルにある「せめぎ合いの時代」が示すように、世界的な状況についても同様であり、限らない拡大・成長を志向するベクトルと、持続可能性やウェルビーイングといった価値を志向するベクトルとが対立し拮抗する状況が当面続くだろう。しかしそれらが全体として、本書で述べてきた人類史における「第三の定常化」への移行局面の現象であることは確かであり、人口や経済など様々な面において現実のものとなりつつある。

(2023年6月14日)